



令和6年、八尾・河内を題材に精力的に取材をしたことで知られる写真家・田中幸太郎さんの旧宅でその「取材ノート」を発見。ご遺族のご厚意により今東光資料館の所蔵資料とすることができました。

今東光の小説にならない「河内風土記 撮影日記」と記された、記念すべき書き出しは今から65年前。

…昭和34年7月12日 日曜日 曇り晴間時々 八尾へ第一歩

今東光師の影響をなしとは云えないが、何か写真集を作りたいと願っていた矢先、ふと思い付いたのが「河内風土記」。題材として採り上げる個所の多い事と地域の広々と云う事も作業には好都合である。何年かかるか分からない仕事ではあるがやり甲斐がありそうで、その第一発を今日から始めた。やっぱり中河内のしかも八尾を中心に始めたのも今氏の「みみずく説法」から汲み取られる民情の面白さに魅かれたためだ。…

…昭和35年8月1日 月曜日 恩智神社夏祭り

午後二時頃よりポツポツと若衆が下の鳥居の元へ参集して二時三十分頃一同揃って伊セ音頭を唱えて登ってくる。社殿にては幹部連中を以って祈祷が始まっている。社殿の右脚には布団太鼓が置いてあり、役員の挨拶がすむと太鼓がかつぎ出される…

(「河内風土記 撮影日記」より)



見つかった取材ノート「河内風土記撮影日記」

「必ずどこかあるはず」とかねてより探していたそれは、「河内風土記 記録帳」と箱書されキャビネットに、まるで玉手箱のように大切に収められていました。

地域の人から丹念に聞き書きしたメモには、パンフレットや地図、新聞記事の切り抜きなどがびっしり貼り付けられ、辞書のように分厚くなっていました。

後に写真集「シャモとレンコン畑」で結実するその記録には、かつての河内の原風景の様子がふんだんに書き留められ、口伝であったがゆえに今となっては他で残されていないような貴重な内容が多く記されていました。

この資料は整理して、企画展示等で改めてご紹介したいと思います。(岡本)

©令和6(2024)年 八尾図書館 今東光資料館



編集・発行：今東光資料館 tel.072-943-3810  
〒581-0003 大阪府八尾市本町2丁目2番8号  
八尾図書館3階



## Series 東光が描いた河内・八尾 ～昭和の子どもの夏～

年々、夏が辛くなってきます。日々全国的なニュースが報じられますが、河内も例外ではありません。昔は自然を活かした涼をとる工夫で暑さをしのぐことも出来ましたが、今やそれだけでは難しくなってきました。

子どもたちは小川で魚捕りや、公園や里山で虫捕りをしたりと、多くの楽しみがありましたが、そうした光景を見かけることは少なくなりました。

東光の小説にも、昭和の河内野には自然が多く残っていた様子が描かれています。

…彼等は泥鰌<sup>どじょう</sup>を捕えて来た。

河内平野の田圃や水の流れの何処にでも泥鰌<sup>たんぼ</sup>がうようよしていた。彼等はそれを捕えてくると、肥って丈夫そうな奴を選んで萱振村に出かけて行った。

晴れた日がつづいた。

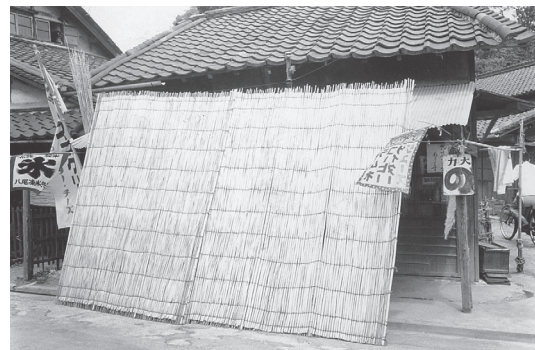
生駒連山が紫色にかすみ、漸く田はいちめん青々と生色をみなぎらしていた。辰ちゃんはバスケットをかつぎ、朝吉が仕掛けを運んだ…(「悪名」より)

もうひとつ、子どもの夏の楽しみといえば、夜店。昭和の頃は夏の商店街などでよく見られましたが、平成半ば以降になると、それがいつの間になくなったり、大きな町内でも道の両側に出ていたのが片側だけになったりと、次第に姿を変えていきました。

そんな懐かしさを味わっていただけるよう、今東光資料館にも昭和の八尾の夜店気分を味わうことができるミニコーナーを設けました。

今東光の描いた時代を体験して頂ければ幸いです。

まだまだ残暑は続きますので、くれぐれもお気を付けて。(岡本)



八尾市本町三丁目付近 昭和34(1959)年7月12日  
「たてす」や「氷」で涼をとります。写真：田中幸太郎

# 東光と青春

十代で上京し、画家をめざした東光でしたが親交の深かった関根正二、東郷青児達の才能に衝撃を受けます。やがて川端康成、菊池寛等との出会いもあり文学の道をあゆみ始めたとされています。

・・・私と東光とは、夕方になると、本郷から小石川、田端にかけた夕暮の道を散歩しました。喫茶店などと言うもののなかった当時のことです。夏の間は、町中に、氷の赤い旗を出した店が何軒もあります。私たちはそこへ寄って、金時と言う小豆の上へ氷をおいて、赤い密をかけた氷を食べるのです。ただ散歩して、氷屋で金時を食べる。それだけの間柄で、ボーイフレンドなどと言へるでせうか。

東光は画を描いていました。私にはよく分らない新傾向の画だったのですが、私にとって、彼が画家であっても、文士であっても、どちらでも宜かったのです。私はただ、彼がほんの少し私を好きになってくれ、そして散歩してくれさえすれば、他に何の要求もなかったからなのです。

東光は色の白い、大きな、いたづらっぽい眼をした、絶世の美少年でした。「信じられない。」と人が言ひますが、その人は五十年の歳月のことを忘れています。・・・

(宇野千代『私の文学的回想記』中央公論社 所収より)  
(挿画・今東光『青春の自画像』より)



ToKo

・・・「そのころ、東光ちゃんは小説にこっていた。五十枚ぐらいのものを一晩で書き飛ばしていた。できあがると私を聞き手に朗読し、読む方も聞く方もひどく興奮して、夜の白むのも忘れることが多かった。その小説をどこかに発表するなどということはまだ考えてもいなかったらしく、一読するとたなに投込んで、また次の構想にとりかかるのだが、その構想のために、夜道をどこまでも歩き、二人ともくたくたになり最後は公園のベンチで始発の電車を待ったりしたこともある。・・・

(東郷青児著「他言無用」毎日新聞社 所収より)

晩年、東光(78歳)は若き日の夢であった二科展初入選を成就します。(木村)

## 東光余聞 No.3-文:伊東 健

### 『広告塔としての作家』

EXPO'70は昭和45年3月15日から9月13日までの間に開催された、日本で初めての国際博覧会だったことは有名です。このイベントは昭和39年9月14日に大阪開催が決定され、5年間に及ぶ準備期間を経たものですが、東京オリンピック開催直前に決まったこともあり、人々を活気づけました。

昭和40年のこの前後には、今東光の人気は文芸の枠を飛び越えて、作家から文化人タレントへと人々へ浸透していったように見えます。本業は僧侶兼作家、余技に講演・テレビ・ラジオと渡り歩く東光は、企業のCM広告にも登場していました。

昭和42年6月15日発行号の「グラフNHK」誌の裏面広告で掲載されているマツダルーチェの広告では、すでに八尾の天台院にやってきた当時の面影はなく、セレブ感が漂っているのが時代を映しています。広告は時代を映すといわれますが、この広告を見ると、東光の物語を知っている人からすれば「よくがんばりました」と涙が出そうになりませんか？

※この広告は現在今東光資料館で展示しています

東光はその広告に次のような文章を寄せています。

「汽車、汽船、電車、飛行機、乗物は何によらず乗心地を最上とする。とりわけ自動車は、日常欠くべからざる物だけに、乗心地のよい車に乗らないと、精神と肉体を害する。その点でこの新車「ルーチェ」は乗心地のよいこと、すなわち微動だにしない点で、驚異的な国産車だ。日本も遂にこのような高級車を産み出したかと感心したが、しかも低廉、しかも6人乗りときては申し分がない。日本人も贅沢を手に入れたと言えるのではないか。」

(「グラフNHK 青春気流」昭和42年6月15日号)

裏面広告「私もルーチェを愛用しています」より

“日本人も贅沢を手に入れた。”というのは、東光の实感がこもった言葉であつたからこそ、広告に説得力があるように思います。車の宣伝で、後ろに乗せてもらうことを前提としているのも、広告がターゲットにしている層もわかりやすいですね。今東光はこの時70歳に近い年齢。大阪万博の準備が進められている社会状況のなかで、東光はいずれ参議院議員全国区への立候補を打診されるまでの人気を博していくのでした。(了)